

長野県における動詞「くれる」の方言的使用

↳ 「水くれ当番」は方言か

鈴木 涼子

一 はじめに

この調査のきっかけは、長野に来て初めて「水くれ当番」という言葉聞き、興味を持ったことにある。県外出身者にとつて聞き慣れないこの言葉を、単純に「長野の方言」「長野の独特の言い方」とまとめてしまつてよいのかと疑問に思った。「水くれ当番」に使われている動詞「くれる」は共通語にもあり、「AがBに物を」と与える「意味を持つ点ではこの「水くれ」の場合でも標準語の場合でも共通しているからである。

「水くれ」は私の見聞の限りでは、話し言葉として用いられていただけでなく、小学校の教室の掲示物で書き言葉としても用いられていた。これは、この言葉の使い手に「水くれ当番」方言」という意識は薄く、誰にも違和感なく受け入れられる共通語と

して用いている可能性があることを示している。

本論では、授受表現の一つである「くれる」の使い方が、長野と他の地域ではどのように異なるのかを、調査の結果によつて示したい。なお、調査は一九九五年から一九九六年にアンケート方式で行つた。その際、出身地だけでなく居住歴や年齢層・性別も考慮して、調査への協力を依頼した。有効回答者数は県内出身者四四五人、県外出身者一二二人であつた。

二 授受動詞「くれる」の用い方

(一) 一般的な用法と長野県出身者の用法

授受動詞「くれる」の意味は、『新明解国語辞典』第五版(一)

九九七年 三省堂) で次のように説明されている。

「くれる」一「人が話し手(の側に)物を」与える。「それをほくにくれ・友だちが妹にくれた本」

二「けいべつしている相手に物を」与える。「じきにくれてやる・目もくれない」

一は、話し手(あるいは話し手側の人)が物を受け取る側となつて、授受を説明する場合に用いる。

一方、二は話し手(あるいは話し手側の人)が、物を与える側となる。その際、物を与える側は受け取る側に対して上位に立っていることが、注として添えられた「けいべつしている相手に」(以後「軽蔑の心情」とも表現する)の表現からわかる。そのため、物を受け取る相手に対して失礼な表現とされている。

また、授受関係において、物を与える側と受け取る側の視点を逆にした動詞に「やる」がある。こちらを用いる方が自然なこともあるが、長野県出身者は少し使い方が異なるようである。彼らは「くれる」「やる」をどのように用いているのか。以下でアンケートの結果をもとに検証する。

(2) 人に対して「くれる」を使う場合

まず、「くれる」の一般的な用法(辞典で示されていたもの)の使用の実態を示す。以下に挙げる例文は、アンケートで使用の可否を質問したものである。語を用いる状況を仮定し、それに()内に付した。

①(医者があなたによく効く薬を与えることを約束したことを、家族に伝える時)

先生が、私にいい薬をくれるつておっしゃっていたよ。

これについては、県内外の出身地を問わず、八七パーセントの人が使う、あるいは違和感がないと回答した。年令や性別の違いも回答に関係なかった。

②(友人と物の取り合いで喧嘩になった時)

こんなものいつだつてくれてやるよ。

この軽蔑の心情を含んだ用法も、出身地を問わず八三パーセントの人が使う、あるいは違和感がないと回答した。ただし、これは動詞「くれる」を単独で述語動詞とした例ではないので、「くれる」を単独で用いた文を使って、もう少し詳しく見てみたい。そこで、次から物の受け手の立場を何種類かに分けてみる。

まずは、物の与え手と受け手とが立場的にはほぼ同じであるか、上下関係をあまり意識しない親しい間柄の場合を想定してみた。他の授受動詞についても同じく調査をしたので、比較のために示す。

③(同年代の友人に、物を与える時)

- a これ、くれるよ。
- b これ、やるよ。
- c これ、あげるよ。

使用に問題がないと回答した割合は表1の通りである。

〔表1〕

③— a くれる 使用可	長野県内出身(%) 四九・八五	長野県外出身(%) 九・八四
③— b やる 使用可	七四・〇三	六八・〇三
③— c あげる 使用可	八二・三九	六八・〇三

上下関係をあまり意識しない間柄であつても、「くれる」の軽蔑の心情を意識してか、「与える」行為そのものを意味する③—bの「やる」や、より相手を大事にした表現③—cの「あげる」を使おうとする傾向はどちらの回答群にもある。しかし、「くれる」をためらいなく使うか否かは、県内外で回答が分かれた。

- 次に、物の与え手から見て、受け手が目上にあたる例として④⑤⑥を挙げる。結果は表2のようになった。
- ④ (身内で目上の人に物を与える時)
おばあちゃん、このようかんくれるよ。
 - ⑤ (子どもの学級担任に御歳暮を渡そうかと夫婦で話し合つ

- ている時) 先生には何をくれたら喜ばれるのでしょうか?
- ⑥ (子どもに「お賽銭」の意味を教える時)
これは神様にくれるお金ですよ。

〔表2〕

④身内 使用可	長野県内出身(%) 二九・二五	長野県外出身(%) 八・二〇
⑤身内以外 使用可	一九・一〇	〇・八二
⑥神 使用可	一三・一九	二・四六

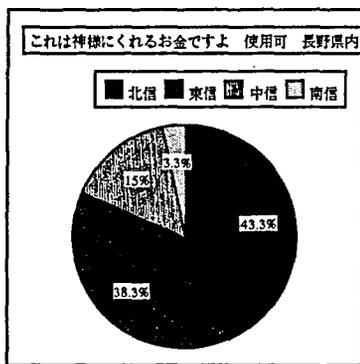
この三つの違いは、受け手に対する親しさの度合いにある。県内出身群に、目上でも身内に対してなら用いるという回答が多かつた。そのうち、六五・三パーセントが身内以外でも使用可能であるとし、回答に一貫性が見られた。この結果から「くれる」は親しみを感じ、上下関係を意識せずにする相手に対してより多く使うのだと言えそうである。

一方、県外出身者群の多くはこの目上の人に対して用いる「くれる」に違和感を持つている。また、それは身内であるか否かに関わりなく使わない、とする回答がほぼ全員から得られた。県外出身者は、与え手が持つ軽蔑の心情は「くれる」の意味の中でかなり強い要素だと感じ、目上の人に用いたら失礼にあたるとい

う意識が働くからだろう。

では、人間を超越した存在が相手ではどうだろうか。親しみの度合いが先ほどより少なくなるせいか、県内出身者群の回答も少ない。しかし、県外出身者がほとんど使わないとする表現を、この例でも何倍もの割合で使っているのには、何か理由がありそうである。これを考えるために、今度は県内出身者群で⑥の神に対しても使うと回答した人を地域別に集計し、構成比を示したのが、グラフ1である。

〔グラフ1〕



結果にはかなり偏りがあり、北信と東信が占める割合がかなり大きかった。また、ここで年齢層による差は見られなかった。

(三) 人から「くれる」を使われた場合

親しみの度合いや人間関係の意識がどのように語の使用実態に反映されているかを確かめるため、今度は、自分が使われた場合の感情を示したい。

⑦目下の者があなたに「この本をくれるよ」と言ってきたら、

どう思いますか。該当するものを全て選んでください。

1よくある表現である 2親しみを感じる 3失礼な言い方

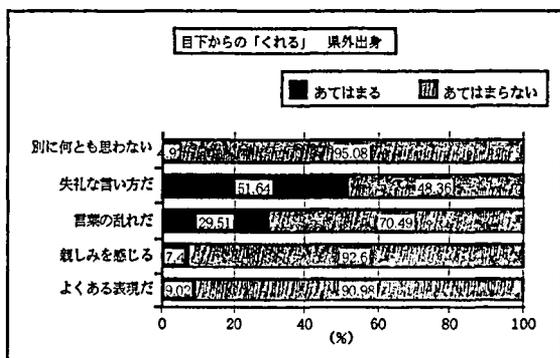
である 4ことばの乱れだ 5別にどうも思わない 6その他(6は自由記述)

今度は⑥での結果を踏まえ、出身地域別に分けて結果を示す。

A 長野県外出身者群 (長野県内在住)

回答の結果はグラフ2に示す通りである。

県外出身者群は、「くれる」の共通語的用法を意識しているためか、目下からの使用に選択肢3「失礼な言い方だ」、選択肢4「言葉の乱れだ」と回答する割合が高かった。選択肢1の「よくある表現である」を選んだ人の割合は九・〇パーセントだったが、この多くは選択肢3・4のいずれか、あるいは両方と合わせて選んでいた。これは、「くれる」を間違っ用いている人が多い



ようだ、という実態を報告した回答だと捉えることもできるだろう。ただし、県内在住者群の自由記述の箇所を見ると、選択肢3・4のいずれか、あるいは両方を選んだ上で、

・長野の方言だと思う。

・方言なのか、間違った言葉遣いなのかわからない。

と記した人がこの回答群の半数近い人数見られた。長野県内でこ

の用法の存在を知ったために、それまで用いていた共通語的用法と区別して、方言的であると意識しているようだ。

これに対して、県外在住者群では、方言的だとする指摘はなかった。この理由は、方言的用法を知る機会がないからだろう。そのため、選択肢3・4のいずれか、あるいは両方を選んだ人で、さらに自由記述をしている人の回答は、

・文法的におかしい。(静岡県浜松市出身40代)

・もらえるのかあげるのか意味がつかみづらい。(茨城県水戸市出身40代)

・何を言いたいのかわからない。(島根県松江市出身20代)

・言葉遣いを知らない奴だと思う。(熊本県熊本市出身50代)
 というものであった。他方、この用法が他の地域にもあるという記述もあった。

・茨城では普通の表現なので茨城の人に言われても気にならない。(茨城県出身30代)

・鹿児島の人を使うから気にならない。(鹿児島県出身20代)
 これらは、方言あるいは方言的な用法が、共通語での用法と共に存在し、使用されていることに気付いている回答ではないか。

『現代日本語方言大辞典』第二巻(明治書院一九九二年)には、
 「くれる」群馬…やる。

埼玉…「やる」の意味でもクレルと言う。

と隣接県についての記述があった。また、山本周五郎の『背べか

物語』（山本周五郎全集 第十四巻）の中に、

「みんな」と長が急に言った、「それじゃあこれ先生にくんか。」

くんかとは、贈呈しようか、というほどの意味である。

「なせ、これ先生にくんべや。」

「先生、これ先生にくんよ。」とかんぶりが言った、「みんな、勝手へいつてあけんべや。」

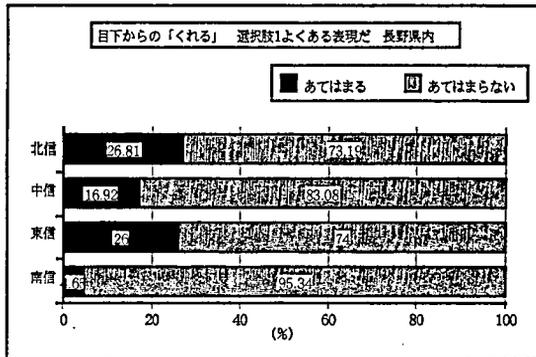
（傍線は筆者が付した）

という用例がある。この物語は千葉県浦安市が舞台だとされている。目上である「先生」に対して生徒たちが「くんか」「くんべや」「くんよ」と動詞「くれる」が方言化した形の語を用いている。ここでのこれらの表現にも、共通語的な軽蔑の心情はなく、文章では「すがすがしく、よみがえったような顔つき」で生徒たちが言った言葉だとされている。

B 長野県内出身者群

県内出身者群で、地域的特徴が見られた結果を示す。

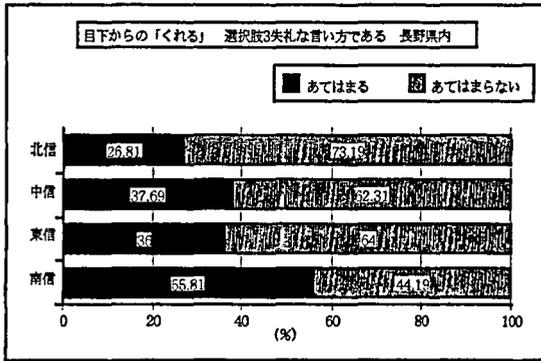
【グラフ3】



グラフ3は選択肢1の回答結果である。北信・中信・東信では南信に比べて目下から自分に「くれる」を用いられても抵抗が少ないと言えるのである。先に挙げた目上に対する使用実態と合わせて考えると、この三つの地域には、相手との上下関係をあまり意識せずに使われる用法が存在するようである。この

回答者に、合わせて選択肢2の「親しみを感ずる」や選択肢5の「別にどうも思わない」を選ぶ割合が高かったことから、地域に根付いた、いわば方言的な用法の存在が考えられる。

「グラフ4」



また、グラフ4を見ると、選択肢3の「失礼な言い方である」の回答率が先ほどの三つの地域に比べて、南信が高い。これは、

軽蔑の心情を含む共通語の意味での語の使用傾向が強く、前述の方言的な用法が存在しないからではないか。実際、
・最初は失礼な言い方に感じたが方言だとわかった。(南信20代)

という意見がある。ただし、三つの地域でも目下の人からの使用を「失礼である」と感じる割合は決して低いとは言えない。これは、共通語的用法と方言的用法の両方が「くれる」の用法として認識され日常的に用いられているために、心情の要素を少なからず方言的用法にも引きずっているのだと考えられる。自由記述の中に次のようなものがあった。

- ・方言として用いているのなら失礼だとは思わない。(北信50代)
- ・相手が同じ地域の出身者かどうか知りたくなる。(東信30代)
- ・友達につきあいではよいが先輩後輩としては違和感がある。(中信20代)

・身内なら気にならないが、それ以外の関係の人だと失礼だと思ふ。(中信30代)

・使う状況や相手との親しさによる。(回答多数)

三つの地域でも、方言的な用法が一人歩きしているわけではなく、共通語的用法も十分に意識されていることがわかる。そして、方言的用法だと認識している人の場合は、親しさの度合いや相手も方言的だと理解するか否かによって、「くれる」を使い分けていることがわかる。

(4) 植物に「くれる」を使う場合

さて、植物が物の受け手となった場合、「くれる」はどのように用いられているのだろうか。比較のため「やる」も調べた。

⑧ (子どもに花に水をかけさせる時)

— a 花に水をくれてきなさい。

— b 花に水をやってきなさい。

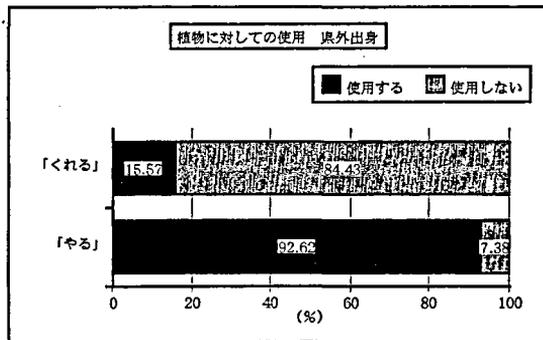
前述した、人に対しての「くれる」の方言的用法が反映されていると予想し、再び出身地域別に結果を見ていく。

A 長野県外出身者群

⑧— a・⑧— bの結果はグラフ5の通りである。

⑧— aの「くれる」よりも⑧— bの「やる」の方が共通語的な使用だと言えるだろう。なお、それぞれについて「使用しない」と回答した人の出身地に偏りはなかったため、その出身地の方言的用法であるかどうかについては、この結果からはわからない。

【グラフ5】

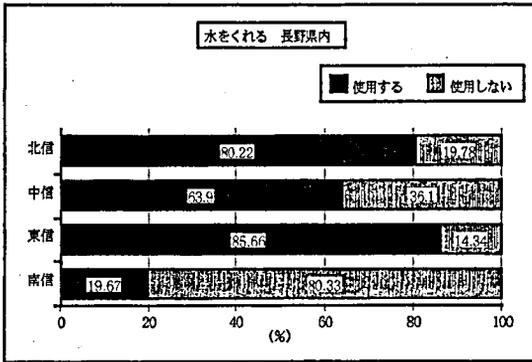


B 長野県内出身者群

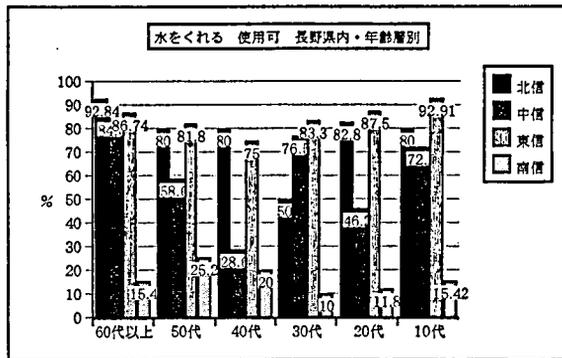
まず⑧— aの結果をグラフ6に示す。前述した目下からの「くれる」の使用の可否の結果を、ここでも反映しているといえるだ

ろう。北信・中信・東信の三つの地域での使用率が、南信に比べて際立って高い。そして方言的な用法として根付いているのかを見るため、年齢層別の使用実態を示したものがグラフ7である。

【グラフ6】

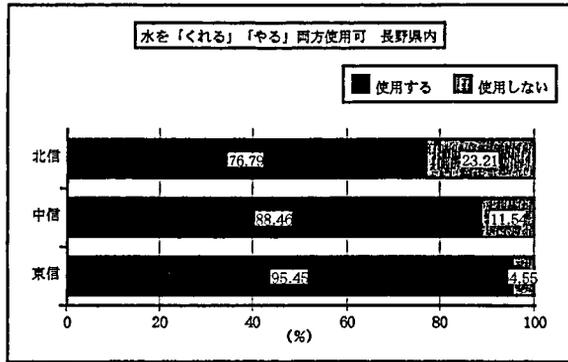


【グラフ7】



先の三地域のうち、特に北信・東信はどの年齢層でも用いている。これは地域での方言的用法として根付いていると考えられる。しかしながら、植物に対して「くれる」を固定的に用いているとは限らないのではないかと考え、「くれる」「やる」の相互使用を調べた。

グラフ8



グラフ8は、それぞれの地域で、植物に対して「くれる」を使用する、とした回答者数を一〇〇パーセントとして、その中で「やる」も使用するとした回答者の割合を示したものである。三つの地域間で差が出来たその一因として、「くれる」の使用の根付き方が考えられる。つまり、グラフ8で双方の使用の割合が低いほ

ど、共通語的使用との間での揺れが少なく、「くれる」を多様な場面に用いていると言える。この三つの地域の中では北信がその傾向が最も強いことになる。

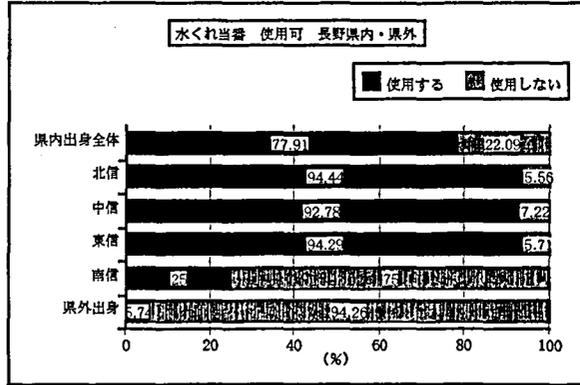
また、共通語あるいは関東地方の方言の影響力の強さも、差を生み出しているのではないか。(3)で方言辞典での記述や物語の会話を引用したが、距離的に東信が最も近く、その影響を受けているということになる。

それでは南信はどうだろうか。「くれる」の使用率は低く、「やる」の使用率が一〇〇パーセントであった。植物に対しては完全に「やる」を用いることが定着しているのだといえる。これは共通語の用法が地域に根付いている可能性と、方言的用法の「やる」が根付いている可能性の両方が考えられる。

三 「水くれ当番」の使用実態

それでは、名詞化した「水くれ当番」はどのように用いられているのか。出身地別に使用を見てみると、グラフ9のような結果であった。

【グラフ9】



「水くれ当番」とは、花に水を与える係の名称である。長野県で特に小学校の教員や児童が口にする語であるが、県外出身者にとっては違和感がある。名詞化の元になった表現は「(人が)花に水をくれる」であるが、先の辞典の語釈の二にあてはめてみ

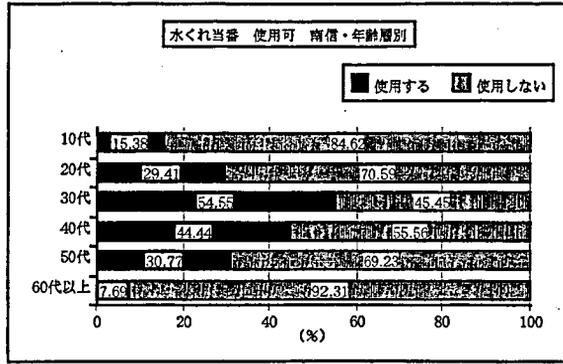
ると、水の与え手(人)が受け手(花)に対して上位に立つことになる。ここで、「花に対して失礼な表現である」と注意する人はいないだろうが、「軽蔑している相手」花」と無情物である点が、表現に不自然さを与えているのではないか。

グラフ9から「水くれ当番」は長野県内でも、北信・東信・中信の三つの地域に根付いた言葉だといえる。南信ではあまり用いられていないようである。なぜ南信では用いられていないのだろうか。これは前述した「水くれ」の用法を反映した結果だとしてよいのだろうか。確認してみたい。

そこで、「水くれ当番」という語を用いる場面についても考察したい。「水くれ当番」は社会生活一般で広く用いられている語とは言いがたい。先に述べたように、学校生活で用いる語と考えるのが自然である。そうすると、何らかの形で学校生活に関わっている年齢層の人が、学童期にこの語を用いた人しか、この語を耳にした口にしたりする機会がないことになる。

そこで、南信での使用率について、年齢層別に見た。学童期に近い世代、今現在学童と接する機会のある教師の世代・父母の世代・祖父母の世代、また接する機会がない世代、と結果が分かれるのではないかと予想したためである。その結果が、グラフ10である。

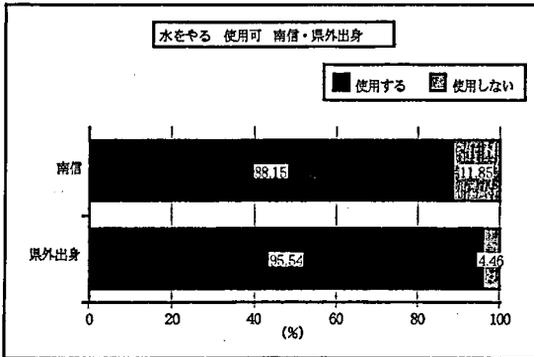
【グラフ10】



南信でこの言葉を用いている人は三十代・四十代の層に多い。ただし九〇パーセント以上の高年齢層が用いない点から、これは南信に根付いていない語だと言える。それでは、多くはないがなぜ南信でもこの語を用いると回答する人がいるのか。可能性とし

て、学校や家庭で南信以外の出身の親や教師がこの語を用いて、子どもが「水くれ当番」という語を覚える、という語の伝播状況が考えられる。または、年代によつて使用率に差が出ていることから、何らかの時代背景による影響もある可能性も考えられるが、その要因についてはここでは分からない。
 それでは、「水くれ当番」は南信ではどんな名称となっているのか。

【グラフ11】



結果はグラフ11の通り動詞「やる」を名詞化した「水やり当番」を高い割合で用いている。南信ではこれが根付いていると言えらるう。使用実態は県外出身者とよく似ていて、この名称は、南信では共通語的な語を用いているようである。

なお、同様に動物に対しての動詞及び名詞化された語の使用実態も調査したが、植物に対しての使用の結果と対応していた。定着の度合いは、動物の場合の「えさくれ当番」よりも「水くれ当番」が高かった。これは動物・植物を問わず名詞化した語を一貫して用いる人の割合が、「水くれ」を用いる人の約八〇パーセントに留まったことからわかる。「えさくれ」は「水くれ」から類推的に出来た語だと考えられるが、まだ地域に完全に根付いてはいない。

四 おわりに

本稿で明らかにしたかったことは三点ある。第一に、「くれる」の方言的用法は長野県全体でなく北信・中信・東信にあり、共通語でいう「やる」に相当することである。南信は「くれる」「やる」を区別して用いている。第二に、「水くれ当番」は先の三地域に根付いた方言的な言葉だということである。「くれる」の方言的用法から生まれたと推測される。第三は、三地域と南信と

で用法が異なる原因の一つは近いと感ずる都市の違いにあり、前者は東京（関東圏）、後者は名古屋（中京圏）の言葉の影響を受けていると思われることである。

「くれる」は共通語にもあり、ごく普通に用いられているため、方言的用法は気付かれにくい。若年層の場合、普段は共通語を用いている割合が高いが、方言的使用のある地域出身者の場合、意識せずに方言として用いているのか、共通語的使用の上で誤用をしているのか（不適切な用い方をしているのか）見極めが難しい。また、後者のような、本来は誤用とされる用法がどの年齢層にまで浸透して社会的に受容されているのかはわからない。これは昨今話題となっている言葉の乱れや誤用の問題に結びつく可能性がある。意識されにくい現象であるために、教育の場で扱うにも工夫が必要だろう。

なお、本稿は本大学院在学中に受講した国語学概論（一九九五年度 山本清隆教官）でのレポート及び同年度二月に松本市立図書館で行われた松本ことばの会での発表資料をもとに執筆した。調査とまとめに多くの方の御協力と御助言を戴き感謝している。

（すずき りょうこ）

静岡県立小山高等学校教諭